

I. 導入一神は宣教の神です。

A. 「宣教」という言葉から思い浮かぶ聖書箇所は何ですか。

- 多くの方は、マタイ28：18-20にある大宣教命令を連想するでしょう。
- しかし、大宣教命令以外にも宣教について語る聖書箇所はたくさんあります。
- 宣教は聖書のすべての書に深く刻まれたテーマです。これはまさに聖書のメインテーマと言えます。

B. 天地創造のときから、神は人間をご自身のもとにあがなうことを考えておられました。

- 人のおもな目的は何でしょう。人の主な目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです。（ウェストminster小教理問答書）
- 聖書は、創世記から黙示録まで、この世に対する神のみこころを明らかにします。神が私たちに、そしてすべての神の民に、呼びかけておられるのは、神の御座で神を礼拝するために全世界の人々を神のもとに連れてくることです。
- 教会の最終目標は、宣教ではなく、礼拝です。礼拝がないから宣教が存在するのです。礼拝が最終目標です。
- 「礼拝がないからこそ、宣教が存在するのです。最終目標は宣教ではなく礼拝です。それは、人ではなく神がその中心だからです。この世が終わるとき、贖われた無数の人々が神の御座の前にひれ伏す時、宣教はもはや存在しません。」ジョン・パイパー師

C. 宣教は、教会や牧師の思いつきではありません。それは、神のみこころです。

- 聖書は、何の一貫性もないばらばらの本を寄せ集めたものではありません。聖書は、ひとつのテーマを持ったひとつの書です。
- 聖書は、ひとつのテーマを持ったひとつの書です。神の物語には、以下の内容があります。
 - 導入（創世記1-11章）
 - 構想（創世記12章-ユダ）
 - 結論（黙示録）
 - ひとつのテーマに基づく66書一人々を礼拝に導くための宣教

II. 学びの結論

父親が息子の嫁を探すためにしもべを遣わしました。

A. 創世記24:59-67を読みましょう。

24:59 そこで彼らは、妹リベカとそのうばを、アブラハムのしもべとその従者たちといっしょに送り出した。 24:60 彼らはリベカを祝福して言った。「われらの妹よ。あなたは幾千万にもふえるように。そして、あなたの子孫は敵の門を勝ち取るように。」 24:61 リベカとその侍女たちは立ち上がり、らくだに乗って、その人のあとについて行った。こうして、しもべはリベカを連れて出かけた。 24:62 そのとき、イサクは、ベエル・ラハイ・ロイ地方から帰って来ていた。彼はネゲブの地に住んでいたのである。 24:63 イサクは夕暮れ近く、野に散歩

に出かけた。彼がふと目を上げ、見ると、らくだが近づいて来た。 24:64 リベカも目を上げ、イサクを見ると、らくだから降り、 24:65 そして、しもべに尋ねた。「野を歩いてこちらのほうに、私たちを迎えに来るあの人はだれですか。」しもべは答えた。「あの方が私の主人です。」そこでリベカはペールを取って身をおおった。 24:66 しもべは自分がしてきたことを残らずイサクに告げた。 24:67 イサクは、その母サラの天幕にリベカを連れて行き、リベカをめとり、彼女は彼の妻となった。彼は彼女を愛した。イサクは、母のなきあと、慰めを得た。

- B. この箇所は、信徒とイエス・キリストとの関係を描いています。父親は、リベカを息子の嫁として求めています。同じように、神は、御子イエス・キリストの花嫁として私たちを求めてくださいました。
- C. 私たち夫婦は、夜にくつろぐときにテレビを見ます。
- 番組によっては、登場人物が病院に入院しているなど、たいへんな目に遭っている場面から急に始まるものもあります。そんなとき、私たちは驚いて、どうなっているのかしらと顔を見合わせたりします。
 - すると、「前回までのあらすじ」などという字幕が出て、それまでに起こった内容を短く説明してくれます。
- D. ではここで、リベカがイサクに会いに行く準備をするまでに起こった内容を説明しましょう。

III. 創世記24: 10-28 父親は、息子の嫁を探すためにしもべを遣わします。

A. 旅のおやつ。

- たましいを勝ち取る、もしくは花嫁を得るためには、使命感が必要です。

10 節で、エリエゼルは旅の準備をして出かけます。

しもべが出かけたのは、花嫁を探しに行くようにと主人に命じられたからです。彼は、神聖な任務を任されました。

「大丈夫。神さまがみんな救ってくださるから」と思っている人もいるかもしれませんが、神は、御子のために花嫁を探しに行くようにと私たちに命じておられます。

- たましいを勝ち取るには、メッセージを伝える（福音の噂話をする）必要があります。

英語の欽定訳聖書は、エリエゼルが主人のすべてのものをもって出かけたと語ります。（比喩表現）

これは、エリエゼルが主人の息子の花嫁を探しに行った時、未来の花嫁に父親が提供するものすべてを持って行ったという意味です。

この意味がわかるでしょうか。これはすばらしいメッセージです。私たちが救い主を必要とする人を求めて出かけるとき、その人が必要なものはすべてキリストのうちに見出すことができると伝えられるということです。何よりも大切な願いや喜び、究極のニーズはすべて、キリストのうちに見出せるのです。

ローマ 8 : 32 にある使徒パウロの言葉が思い浮かびます。

「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありますでしょう。」

エリエゼルは、花嫁を探しに行ったとき、父親のものをすべて手にして出かけました。私たちも、救い主を必要とする迷える世の中に出ていくとき、力強いメッセージを手にして出かけます。

そこには、罪人が必要なものがすべてあります。イエス・キリストというお方のうちにすべてはあります。

その人たちに救い主が必要なことを、恥ずかしがらずに伝えましょう。

エリエゼルは、使命感とメッセージを持っていました。

- エリエゼルには、使命感とすばらしいメッセージがありました。しかし、花嫁を得るためには、その進め方に対する忠実さも問われます。

- a) 人のいるところに行きます。(ルカ 10 : 1)

「あなたが行くところには王なるお方も行かれます。王なるお方の行かれるところでは、あらゆる力も頭を垂れざるを得ません。」ニール・コール

- b) 人のいるところに行くだけではなく、御霊の導きを信じなくてはなりません。12 節は次のように語ります。

「【主】よ。きょう、私のためにどうか取り計らってください。」

- c) 神の働きをじっと待つ忍耐が必要です。

21 節には、エリエゼルが「黙って見つめていた」とあります。

罪人の心のうちに起こる御霊の働きは、目に見えない不思議なものです。一晚にして起こることではありません。

エリエゼルは、人が集まる井戸のところに来ました。そして、主の導きを求めて静まり、自分のメッセージを伝える機会を待ちました。

皆さんにお尋ねします。「神はあなたに語っておられますか。」

IV. 創世記 24:29-33、49-58 従うという決心をすると、反対されることがあります。

A. 従順には犠牲が伴います。

- あなたはどう答えますか。今日の聖書箇所から、キリストというお方に従う決心をすると、反対されることがわかります。

B. そのような反対は、この箇所の場合、3 方向から来しました。

- 身近な人から反対されることがあります。—

29 節には、「リベカにはひとりの兄があつて」と記されています。

- ラバンは、キリストとの歩みを止めさせようとする人の例です。

ラバンは、この世の物事に心を奪われている人の象徴です。(30 節)

ラバンは、飾り輪や腕輪を見て、そのしもべを家に迎え入れることにしました。後に、ラバンは甥のヤコブをだまします。ヤコブにラケルを与えると約束したのに、実際にはラケルの姉のレアを与えました。すべては富のためでした。

この世の物事に心を奪われているせいで、私たちのキリストとの歩みに反対しようとする人はたくさんいます。

➤ ラバンは、便宜上クリスチャンだという人の象徴です。

ラバンは 31 節で「どうぞおいでください。【主】に祝福された方。」と言っています。

その言い回しから、ラバンはそれらしい言い方を知っていたことが分かります。

➤ ラバンは、口先だけで名ばかりのクリスチャンで、その生き方や性質が伴っていない人の代表例です。

そのような人たちは、私たちのキリストとの歩みが行き過ぎだとか熱心すぎだと言って、それをやめさせようとしています。

✓ コリンの市場宣教の例

✓ ウォッチマン・ニーの言葉

「ほとんどの人はあまりにも低俗な生き方をしているので、クリスチャンがあるべきクリスチャン生活を送ると、それはたいていの人の目には異常だと映る。」

○ 私たちのために立てられた計画が邪魔になることもあります。

「娘をしばらく、十日間ほど、私たちといっしょにとどめておき」 (55 節)

○ ベトエルとラバンは、リベカのために計画を立てていました。ふたりは、リベカをあと 10 日間そこにおらせて、それから行くようにと言いました。

エリエゼルはこれに、「私が遅れないようにしてください。」と答えました。リベカがどんな状況に置かれたか想像できますか。両親と兄に反対されたのです。「リベカ、これまで大事に育ててきて、何でも与えたのに。あなたはこの男の言うことを聞いてついていくのか。10 日間も待てないのか」と言うわけです。

○ キリストに従ってついて行くことについてお伝えしたいことがあります。信仰と行動を要する信仰上の重大な局面に立たされたとき、次にどうするかが、自分の本当に信じていることを明らかにします。

○ 周囲からのプレッシャーが邪魔になることもあります。

「彼らはリベカを呼び寄せて、『この人といっしょに行くか』と尋ねた。」 (58 節)

この場面で、彼らがどんな言い方をしたか考えてみましょう。この部分を読んだだけでははっきりとはわかりません。ですから、場面設定をはっきりさせましょう。

51 節で、彼らはエリエゼルに同意しました。その結果、エリエゼルはあらゆる品々をリベカにも家族にも贈りました。(53 節)

- しかし、実際にはどうでしょう。いざ出発という段階になって、両親の気が変わります。10 日間猶予をくださいとすでに願い出たので、最後の手段として、手塩にかけて育てた娘リベカに言います。「私たちが捨てて、この男といっしょに行くのか！」
- 偉大な C.S.ルイスはこう語ります。

「朝目覚めると同時に、今日という日に対する自分の希望や願いが押し寄せてきます。ですから、朝起きて一番にすべき仕事は、それらを脇に置くことです。もうひとつの声を聞くこと、もうひとつの視点を受け入れること、もうひとつの偉大で力強く穏やかないのちに満たしていただくことです。」

V. 創世記 24:59 – 67

- A. この最後の部分は、信徒とイエス・キリストとの関係性を麗しく描いています。父親は、息子の花嫁としてリベカを求めます。同様に、神は私たちが御子イエス・キリストの花嫁として求めてくださいます。
- B. 私たちが、「はい、まいります」と言えば、旅の始まりです。その旅の終わりには、キリストと顔を合わせることとなります。リベカの旅は、信徒の信仰の旅路をあらわします。
- C. この旅路について、皆さんのキリストとの歩みの励みとなるように、いくつかのことをお話しましょう。
 - キリストを信じる信仰生活は、決心から始まる。
リベカは、「この人といっしょに行くか」と尋ねられ、「はい。まいります」と答えました。

これは、リベカ自身の決断です。リベカは自分がどうするか答えたのです。信仰生活も、親や教会、友だちの決断で始まるものではありません。信仰生活は、私たちがそれぞれ自分でキリストを主として迎えると決心することで始まります。

イエスを救い主であり人生の主とし、主イエスについていくという決断は、他の誰でもない、あなた自身がしなくてはなりません。これが、神との一対一の関係なのです。

- 次に、決心によって始まったキリストを信じる信仰生活は、その後、弟子となることによって続きます。

リベカはその人についていく決心をし、彼女の旅が始まりました。同様に、私たちもキリストについていくと決心し、信仰の旅路が始まりました。

その旅の途中で、リベカにいくつかのことが起こりました。

これは、クリスチャンになってキリストのもとへ帰るまでの旅路を歩み始めた私たちにも起こることを象徴しています。

- 私たちもリベカのように、私たちの花婿の人格や特徴について知るようになります。

ここで、想像してみてください。リベカはイサクに一度も会ったことはありません。ただ純粹に信じて出かけたのです。この人について他の人から聞かされ、「はい、まいります」と言いました。

旅の間中、リベカはきっとエリエゼルにいろいろ質問したでしょう。「彼はどんな人ですか。」「もっといろいろ教えてください。」「権力者ですか。」「お金持ちですか。」「有名人ですか。」「

- 自分の決心や忠誠心以上の何かをしっかり根ざしていないと、足元のおぼつかない旅路となるでしょう。キリストという堅固な岩の上に私たちは立つ必要があります。「自分の神を知る人たちは、堅く立って事を行う。」(ダニエル 11 : 32)

- リベカのように、私たちもキリストについていくと決心して、信仰の旅路を歩み始めると、神に受け入れられているという約束を頼りにすることを学びます。

リベカはおそらく、会ったこともない男性に会いに行こうとしているけれど、その人は私を受け入れてくれるかどうかはわからない、という気持ちだったでしょう。

きっと不安だったでしょう。それで、「その人が私を歓迎してくれるとどうしてわかるのですか」とか「その人が私を家に入れてくれるとどうしてわかるのでしょうか」とエリエゼルに尋ねたかもしれません。

「この旅に出たことが時間と人生の無駄でないとどうやって確信できるのでしょうか。」

エリエゼルはその問いに、「それは約束だから」と答えます。

- リベカのように、私たちにも神における自分の立場が不安になることがあるでしょう。けれども、神が義と認めてくださるという約束をしっかり握れば、つらいときも乗り越えられます。
- 過去に犯した罪が次々とフラッシュバックしたり、自分の悪いところばかりが目についたりするとき、どうしても不安になります。そして、リベカのように、「神が私なんかを受け入れてくださるだろうか」と疑います。
- そんなときにこそ、神を信じる信仰によって義と認められるという神の約束を頼りにしなければなりません。

- リベカのように、私たちのキリストを信じる信仰の歩みは決心から始まります。そして、弟子となることでその信仰の歩みが継続していきます。しかし、それだけではありません。最後のポイントです。

- キリストを信じる信仰の人生は、宣言によって完結します。
イサクがリベカと初めて顔を合わせたとき、この出会いを表現する素敵な言葉が登場します。

それは 67 節にある、「彼は彼女を愛した。」という言葉です。

なんて素敵な言葉でしょう。

「キリストは彼を愛した。」「キリストは彼女を愛した。」そして「キリストは私を愛した。」

神は、ご自身の選ばれた花嫁に対する深い愛を、永遠というかたちで表されます。

「2:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、 2:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです—— 2:7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。」

(エペソ 2 : 4-5,7)

65 節には、リベカが目をあげると、イサクが彼らを迎えるために野を歩いていたとあります。

イエス・キリストも、私たちを迎えるために野を歩いておられます。

黙示録の出来事と、神が創世記 12 章のアブラハムの人生に始められた事柄に関連性があると認識することが大切です。神はこれを実現なさいます。あらゆる国民、部族、民族、国語から大勢の人が神の足元にひれ伏して礼拝するでしょう。天国は国際色豊かな場所です。神は宣教の神です。そして、聖書の最初から最後まで一貫して、ご自身の宣教の働きを私たちに示してくださっています。